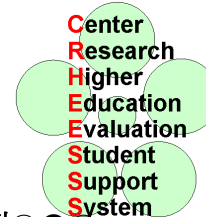


週刊センターニュース No.334

第334号(2010年11月24日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm



○●○Ability-based Learning Outcomes –アルバーノ・カレッジの事例○●○

本学では、現在、カリキュラム検討委員会CP・DP策定WGにおいて各学類の学習成果(Learning Outcomes)の明確化、学習成果と各授業科目との関連づけの作業が進められている。従来、高等教育の教育結果は、教員の視点から各学問分野のどのような事項を教えたかに言及することにより示されてきたが、現在、学生がどのような能力を身につけたか(Ability based)を厳しく問う社会の状況は世界的な流れとなっており、グローバル化のもとで学習成果の明確化と学習成果の評価は必須となっている。

学習成果は、各授業科目の学習目標の達成の累積と卒業研究やゼミナールの教育成果の総体であるが、学習成果の評価においては、どのような能力を身につけるかを示す授業科目の学習目標の達成度と卒業研究やゼミナールで獲得した能力を可視化し示すことが前提となる。授業科目における一つの方法は、講義型授業においてもProblem Based Learningの要素を導入することであろう。各学問分野の学習を通して獲得する能力を設定し、そのために提示すべき課題(Problem)を設計するのは各教員である。レポート課題もまたProblem Based Learningといえるであろう。どのような能力を身につけたかを実証できる課題(problem)の設計がAbility-based Learning Outcomesの可視化につながる。卒業研究等は典型的なProblem Based Learningであり、その教育効果についての従来からの評価は極めて高く、今後はその卒業研究課題やゼミナールで提示される課題に取り組む過程においてどのような能力が身についたかを明確にすることが重要であると思われる。

Ability-based Learning Outcomesの事例として、アメリカのアルバーノ・カレッジを以下に紹介する[1,2]。本学におけるCP・DP策定と関連して、授業科目の学習目標の達成度評価(成績評価)について各学類でのFDとして議論することがCP・DP策定WGより要望として示されているが、以下の事例は、成績評価の議論は、各学類の学習成果を各教員が共有した上で、各授業科目の学問分野を通して、学習成果としての能力を学生が獲得したことを実証できる課題(Problem)をいかに設計するかに着目することを示している。

カトリック系リベラルアーツ4年制女子大学のアルバーノ・カレッジの学生は、授業科目等での様々な学問領域の学習・研究を行う過程で8つのコアとなる能力を実証することが求められる。8つの能力とは、「コミュニケーション」、「分析」、「問題解決」、「価値判断」、「対人能力」、「グローバルな視野」、「効果的な社会参加」、「美的感受性」である。これら8つの各能力は、学生の在学期間を通じた発達に合わせてそれぞれ6つのレベルに分割されている。一般教育課程はレベル1-4、専門教育課程はレベル5-6に対応している。8つの能力すべてについてレベル4までの達成が卒業要件となっている。レベル5, 6の達成は学生の専攻ごとに卒業要件として設定されている。例えば、「分析」と「問題解決」のレベルは以下の通りである。

「分析」:

初級レベル: 現象の個々の要素とそれらの間での相互関係を観察する。

レベル1-正確に観察できる。

レベル2-観察から合理的推論を引き出すことができる。

中級レベル: 理解を深める形で、学問分野での概念とフレームワークを用いる。

レベル3-関係を読み取り、また作り出すことができる。

レベル4-構造と構成を分析できる。

上級レベル（専門課程）：意識的にまた目的をもって学問上のフレームワークを適用し、複雑な事象を分析する。

レベル5－フレームワークの理解に磨きをかけ、現象を説明するのにどのフレームワークが最適かを決定する基準を特定できる。

レベル6－複雑な問題を分析するのに、主専攻と副専攻の学問的フレームワークを独立して適用できる。

「問題解決」：

初級レベル：問題解決プロセスを分解し、学問分野でのフレームワークが問題解決にどのように用いられるかを理解する。

レベル1－問題へのアプローチの個々のステップを明示化することにより、問題解決プロセスを分解できる。

レベル2－問題へのアプローチで、学問分野の問題解決プロセスの個々の要素を実際に試してみることができる。

中級レベル：問題へのプロセスと提案した解決法に対し責任を負う。

レベル3－評価や現実の問題解決あるいはそのシミュレーションを含め、1つの学問分野での問題解決プロセスの全てのステップを実際にやってみせることができる。

レベル4－様々なアプローチを独力で分析し、選択し、使用し、評価することができる。

上級レベル（専門課程）：様々な問題解決方法を、専門的職業での多岐にわたる状況下で用いる。

レベル5－協力して問題解決にあたる時、グループプロセスの理解を効果的運用に転移する能力を実証することができる。

レベル6－専門的職業・学問分野の方法とフレームワークを以下の仕方で適用できる：それらを個人的価値観や見解と統合する、それらを実際のフィールドという場で応用する、問題解決のための活動を構築し遂行する上で主体性と創造性を実証する。

各授業科目で出される課題（Problem）の評価基準では、以下の例のように、上述した実証すべき能力との対応関係が明示される。以下のような明確な評価基準（実証される能力）を明示した課題を設計することが教員に求められる。なお、授業科目の成績は、PassかFailのどちらかで判定する。

1. 情報収集の際、正確かつ詳細な観察をなさい。

（「分析」と「問題解決」レベル1と2）

2. ミクロ文化と自民族中心主義に関して堅固な推論をするために、観察から十分な証拠を提示しなさい。（「分析」と「問題解決」レベル2）

3. [随意的]社会学の理論を正しく用いて、ミクロ文化と自民族中心主義を解釈しまた分析しなさい。（「分析」レベル3）

4. あなたが観察できた価値観を特定し、それらを自分の価値観と比較しなさい。またミクロ文化または自民族中心主義に対してあなたが経験した勘定について論じなさい。（「価値」レベル1）

以上のアルバーノ・カレッジのAbility-based Learning Outcomesの事例は、全学での学習成果の共有とそれに基づくカリキュラムが前提となっている。本学において、学類ごとの学習成果の明確化が全構成教員によりFDとして行われることが、各授業科目での学習目標を各教員が明確にし、対応する課題を設計する上で重要であると考えられる。

（文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭）

[1]平成19年度文部科学省大学教育の国際化推進プログラム「英米大学に学ぶ社会人基礎力教育プログラム」実施報告書（信州大学、平成20年3月）第4章「アビリティ・ベースのカリキュラム－アルバーノ・カレッジ」加藤鉦三

[2]研究プロジェクト中間報告書「大学の学習成果を軸とした教育・評価・エビデンスの発信を可能とする体制についての研究」（独）大学評価・学位授与機構（平成21年度）、第9章・河合塾調査－アルバーノ・カレッジにおける学習成果の可視化について